連立 1 次方程式の解法

変数消去と行基本変形 1

次の連立1次方程式の解を求めたい.

$$\begin{cases} x + & y = 2 \\ x + & 3y = 4 \end{cases}$$

変数消去を用いて解を求めるが、係数と右辺の変化の様子を行列を用い て表してみよう.

$$\begin{cases} x+ & y = 2 \\ x+ & 3y = 4 \end{cases}$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad$$

よって、解は x = 1, y = 1 である.

上記の連立 1 次方程式と行列を比べると、行列は、連立方程式の変数 $x,y \in \mathcal{E}$ を省略しただけのものである。また、上記の変形には、

- 1. ある式の定数倍を他の行にた | 1. ある行の定数倍を他の行に足 す
- 2. 式を入れ換える1
- 3. 式に 0 以外の数をかける
- 2. 行を入れ換える
- 3. 行に 0 以外の数をかける

という対応関係があるので、変数消去で用いる操作は、行基本変形と 同等である。

¹上記では、この操作は行っていない。

2 拡大係数行列

行列とベクトルの積を考えると,

$$\begin{cases} x+ & y = 2 \\ x+ & 3y = 4 \end{cases} \longleftrightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ 4 \end{pmatrix}$$

とかける。このとき、 $\begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 3 \end{pmatrix}$ を 係数行列 と呼ぶ。また、先程の変数消

去を表すために用いた行列 $\begin{pmatrix} 1 & 1 & 2 \\ 1 & 3 & 4 \end{pmatrix}$ を 拡大係数行列 と呼ぶ (行列内部の縦線は書かなくて良い)

一般に、連立 1 次方程式は、行列 A とベクトル b を用いて、

$$Ax = b$$

と表すことができる。このとき,係数数行列は A,拡大係数行列は $(A \mathbf{b})$ である。

特に、連立1次方程式は、拡大係数行列を行基本変形することで解く ことができる。理論的にも重要であることから、今後は連立1次方程式 は、拡大係数行列を用いて解いて欲しい。

3 例題

例題 1. 次の連立 1 次方程式を解け.

$$\begin{cases} x+ & y+ & z = 6 \\ x+ & 2y+ & 2z = 11 \\ 2x+ & 3y- & 4z = 3 \end{cases}$$

(解答) 行基本変形より、まず階段行列を求めると、

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 1 & 2 & 2 & 11 \\ 2 & 3 & -4 & 3 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 1 & 1 & 5 \\ 0 & 1 & -6 & -9 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 1 & 1 & 5 \\ 0 & 0 & -7 & -14 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 1 & 1 & 5 \\ 0 & 0 & 1 & 2 \end{pmatrix}.$$

さらに後退消去(下のような操作. 改めて定義はしない)を行うと,

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 1 & 1 & 5 \\ 0 & 0 & 1 & 2 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 & 4 \\ 0 & 1 & 0 & 3 \\ 0 & 0 & 1 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 & 3 \\ 0 & 0 & 1 & 2 \end{pmatrix}$$

ここで、得られた行列が表す連立1次方程式は

$$\begin{cases} x & = 1 \\ y & = 3 \\ z & = 2 \end{cases}$$

でとなるので、
$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 3 \\ 2 \end{pmatrix}$$
 である.

例題 2. 次の連立 1 次方程式を解け.

$$\begin{cases} x + & y + & z = 6 \\ x + & y + & 2z = 11 \\ 2x + & 3y - & 4z = 3 \end{cases}$$

(解答)

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 1 & 1 & 2 & 11 \\ 2 & 3 & -4 & 3 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 1 & -6 & -9 \end{pmatrix}$$

2行2列が0になった。このときは、行の交換をして行基本変形を進める。

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 1 & -6 & -9 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 1 & -6 & -9 \\ 0 & 0 & 1 & 5 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & -20 \\ 0 & 1 & 0 & 21 \\ 0 & 0 & 1 & 5 \end{pmatrix}.$$

よって,
$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -20 \\ 21 \\ 5 \end{pmatrix}$$
 である.

4 解を持たない連立 1 次方程式

今までの問題は、解を求めることが出来たが、連立 1 次方程式には解を持たないものも存在する。次の連立方程式を考えよう。

$$\begin{cases} x+ & y = 1 \\ x+ & y = 2 \end{cases}$$

この連立方程式に解が存在したとする。すると、(第 2 式) - (第 1 式) より、

$$0 = 1$$

となり矛盾である。よって、連立方程式に解は存在しない。これを拡大係数行列で表すと、

$$\left(\begin{array}{cc|c} 1 & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 2 \end{array}\right) \rightarrow \left(\begin{array}{cc|c} 1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{array}\right)$$

となる. 行基本変形後の行列の最後の行が (0,0,1) のとき, 0=1 という矛盾した式が現れる.

例題 3. 次の連立 1 次方程式を解け、

$$\begin{cases} x + & y + & z = 6 \\ x + & y + & 2z = 11 \\ 2x + & 2y - & 4z = 3 \end{cases}$$

(解答)

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 1 & 1 & 2 & 11 \\ 2 & 2 & -4 & 3 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 0 & -6 & -9 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 0 & 0 & 21 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}.$$

よって連立1次方程式は

$$\begin{cases} x+ & y = 1 \\ & z = 0 \\ & 0 = 1 \end{cases}$$

と変形されたので、解は存在しない.

5 解が無限個有る場合(パラメータ表示)

連立1次方程式には、無限個の解を持つものもある。

$$\begin{cases} x+ & y = 1 \\ 2x+ & 2y = 2 \end{cases}$$

この連立方程式で、変数消去をすると、第2式が消えて、

$$x + y = 1$$

という式だけが残る. 実際, この連立方程式には, 本質的には一つの方程式しかない. この方程式の解は, $(x,y)=(1,0),(2,-1),(3,-2),\dots$ など, 無限個の解があることがわかる.

この場合, t をパラメータとして, y = t とおくと,

$$x = 1 - y = 1 - t$$

とかけるので、解は

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 - t \\ t \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -t \\ t \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

と書ける.実際,任意の t に対して, $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix}$ を代入すれば,連立方程式を満たすことがわかる.

例題 4. 次の連立 1 次方程式を解け.

$$\begin{cases} x + 4y + 2z + 3w = 1 \\ 2x + 3y + 4z + w = -2 \\ 3x + 2y + z + 4w = 3 \\ 4x + y + 3z + 2w = 0 \end{cases}$$

(解答)

$$\begin{pmatrix} 1 & 4 & 2 & 3 & 1 \\ 2 & 3 & 4 & 1 & -2 \\ 3 & 2 & 1 & 4 & 3 \\ 4 & 1 & 3 & 2 & 0 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 4 & 2 & 3 & 1 \\ 0 & -5 & 0 & -5 & -4 \\ 0 & -10 & -5 & -5 & 0 \\ 0 & -15 & -5 & -10 & -4 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 4 & 2 & 3 & 1 \\ 0 & 5 & 0 & 5 & 4 \\ 0 & 0 & -5 & 5 & 8 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 4 & 2 & 3 & 1 \\ 0 & 5 & 0 & 5 & 4 \\ 0 & 0 & -5 & 5 & 8 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & -\frac{8}{5} \\ 0 & 0 & 1 & -1 & -\frac{8}{5} \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 1 & 0 & 1 & \frac{4}{5} \\ 0 & 0 & 1 & -1 & -\frac{8}{5} \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}.$$

よって連立1次方程式は

$$\begin{cases} x & + w = 1 \\ y & + w = \frac{4}{5} \\ z - w = -\frac{8}{5} \end{cases}$$

と変形された.

パラメータ t を用いて, w=t と置くと,

$$\begin{cases} x = 1 - t \\ y = \frac{4}{5} - t \\ z = -\frac{8}{5} + t \end{cases}$$

と書ける. よって, 解は,

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 - t \\ \frac{4}{5} - t \\ -\frac{8}{5} + t \\ t \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ \frac{4}{5} \\ -\frac{8}{5} \\ 0 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -t \\ -t \\ t \\ t \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ \frac{4}{5} \\ -\frac{8}{5} \\ 0 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

と書ける.

6 文字の入った連立 1 次方程式

例題 5. 以下の連立方程式が解を持つように、a を定めて解を求めよ.

$$\begin{cases} x + & y + & z = 6 \\ x + & y + & 2z = 11 \\ 2x + & 2y - & 4z = & a \end{cases}$$

(解答)

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 1 & 1 & 2 & 11 \\ 2 & 2 & -4 & a \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 0 & -6 & a - 12 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 0 & 0 & a + 18 \end{pmatrix}.$$

よって連立1次方程式は

$$\begin{cases} x + y + z = 6 \\ z = 5 \\ 0 = a + 18 \end{cases}$$

と変形された. 最後の式に注目すると, a+18=0 のときのみ解が存在することがわかる. このとき連立 1 次方程式は

$$\begin{cases} x + & y & = 1 \\ & z = 5 \end{cases}$$

となる. よって解が存在するのは a=-18 のときであり, そのとき, パラメータ t を用いて y=t と置くと, 解は

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 5 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$$

と書ける.